

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成13年度日本語教育短期研修報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/1923

平成 13 年度日本語教育短期研修報告

『多言語環境にある子どもの言語能力の評価』

日時：平成 13 年 7 月 7 日（土）

場所：国立国語研究所講堂，第一研修室（1 号館 5 階，同館 2 階）

参加人数：110 名（ワークショップ 1：31 名，ワークショップ 2：40 名含）

家庭や地域、学校において複数の言語と接しながら育つ子どもたちが増えてきている。そうした多言語環境にある子どもたちの力を十分に伸ばす教育のためには、子どもの言葉の力をきちんと見極める必要がある。現場からも強い要請があるが、まだ研究や評価方法の開発が十分とは言えない。今回の研修会では、国立国語研究所が実施した研究プロジェクトの中で用いた、子どもの日本語と母語の両言語の能力を測る 2 種類のテストを具体的な例として取り上げながら、子どもの言語能力をどうとらえ、どう評価するかについて考えた。

『子どもの言語能力評価の考え方』

「子どもに対する評価をどう考えるか」佐藤郡衛（東京学芸大学海外子女教育センター）、「バイリンガル児の言語能力評価の観点—会話能力テスト（OBC: Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children）開発を中心に—」中島和子（トロント大学）、「学習言語能力をどう測るか—TOAM（Test of Language Acquisition and Maintenance）の開発：言語習得と保持の観点から—」岡崎敏雄（筑波大学）

『日本語・母語による言語能力テストの実例』

【ワークショップ】1 OBC（会話能力テスト）中島和子（トロント大学）、鈴木理子（国立国語研究所）、2 TOAM（聴解・読解・語彙テスト）岡崎敏雄（筑波大学）、石井恵理子（国立国語研究所）

『日本語教材と著作権』

日時：平成 13 年 8 月 23 日（木）

場所：国立国語研究所講堂（1 号館 5 階）

参加人数：88 名

日本語学習者の多様化に伴い、日本語教育関係者も急速に拡大し、様々な現場で教材が作成され使用さ

れている。また、近年はコンピュータ使用の度合いも高まり、教室活動の形態が豊かになった反面、学習者と教師、そして教材との関わりがより複雑になってきた。そのため、教科書、問題集、映像、自主作成教材などありとあらゆるものが教材として用いられている中で、無意識に著作権を侵害していたり、侵害されていても気が付かなかつたりする場合が少なくない。教師が教材を作成あるいは使用する場合のみならず、学習者にホームページ、新聞を作らせるといった活動を授業に取り入れるような場合にも、教師は著作権について正しく理解しておくことが必要である。今回の短期研修では、日本語教育の様々な現場で著作権が問題となるのはどういう場合なのか、逆に問題とならないのはどんな時なのか、そして著作物を保護するためにはどうしたらいいのかなどを話題とし、著作権とうまくつきあっていく方法を模索した。

【事例検討】、【講演】「インターネット時代の著作権」岡本薫（文化庁著作権課）、【実践報告】「著作権とのつきあい方」①「市販教材作成者の立場から」角本浩美（文化外国語専門学校）、西村学（同）、②「自主教材作成者の立場から」黒崎亜美（ラボ日本語教育研修所）、③「ボランティアの立場から」五十嵐京子（国際ボランティアセンター山形）

『対照研究と日本語教育』

日時：平成 13 年 11 月 24 日（土）

場所：神戸大学神大会館 2 階六甲ホール

参加人数：51 名

言語の対照研究は外国語教育への応用を目的として出発した。実際、学習者の母語と学習言語の異同に関する情報は、教師が効果的な指導法を考えるために重要な役割を果たすと考えられている。しかし、対照研究については「教育現場で直接役に立つ成果が出されていない」という意見もよく聞かれる。今回の短期研修では、「言語の対照研究とは何か？」、また「対照研究の成果が日本語教育に有効に活用されるためには何が必要か？」といった点について、言語研究と言語教育の両方の視点から考えた。

【講演】「言語の対照研究の役割」井上優（国立国語研究所）、「対訳作文データベース」宇佐美洋（国立国語研究所）【発題】「外国語を専門とする日本語教師の立場から」水野マリ子（神戸大学）、「外国語を母語とする日本語教師の立場から」朴鍾祐（神戸大学）、「日本語教育の現場の立場から」金田智子（国立国語研究所）、「言語教育の立場から」河野俊之（同志社大学）

『対照研究と日本語教育』

日時：平成13年12月2日（土）

場所：国立国語研究所講堂（1号館5階）

参加人数：46名

言語の対照研究は外国語教育への応用を目的として出発した。実際、学習者の母語と学習言語の異同に関する情報は、教師が効果的な指導法を考えるために重要な役割を果たすと考えられている。しかし、対照研究については「教育現場で直接役に立つ成果が出されていない」という意見もよく聞かれる。今回の短期研修では、「言語の対照研究とは何か？」、また「対照研究の成果が日本語教育に有効に活用されるためには何が必要か？」といった点について、言語研究と言語教育の両方の視点から考えた。

【講演】「言語の対照研究の役割」井上優（国立国語研究所）、「『対照研究』と『言語教育』をつなぐために」熊谷智子（国立国語研究所）【発題】「外国語を専門とする日本語教師の立場から」太田亨（金沢大学）、「外国語を母語とする日本語教師の立場から」カネギ・ルース（国立国語研究所）、「日本語教育の現場の立場から」金田智子（国立国語研究所）、「言語教育の立場から」徳井厚子（信州大学）

『コンピュータと作文添削』

日時：平成14年1月12日（土）

場所：国立国語研究所講堂，第一研修室（1号館5階，同館2階）

参加人数：21名（分科会1：13名，分科会2：8名）

近年、日本語教育の場において極めて広い範囲でコンピュータが使用されるようになってきている。作文教室においても、例えば学習者にコンピュータ上で文章を書かせ、教師はそれをコンピュータ上で添削す

る、という試みは決して珍しいものではなくなってきている。ただ、「作文添削」という作業は教師一人一人の個人的工夫に負うところが多く、自分以外の教師がどのような添削を行っているのかということについては、あまり知られる機会がない。コンピュータ上で添削を行うことにはどのような利点があるか、オープンな議論が必要なのではないだろうか。国立国語研究所では、XMLというマークアップランゲージを用い、コンピュータ上での作文添削を支援するためのツール（試作版）を2種類作成した。本研修では、この2種類のツールの使用方法についての説明を行うとともに、これらのツールを実際に作文教育の場に応用していくにはどうすればいいか、また作文教育に関する研究に役立てるにはどのようなやり方があるか、ということについて、参加者の方々と一緒に議論した。

【分科会】1 佐々木泰子（お茶の水女子大学）、2 宇佐美洋・竹田麻衣（国立国語研究所）

『日本語習得における社会・心理的側面の研究方法』

日時：平成14年3月9日（土）

場所：国立国語研究所講堂（1号館5階）

参加者数：167名

第2言語習得研究においては、言語的な側面だけでなく、社会的・心理的側面も考慮することが重要であることが指摘されてきた。しかし、これまで第2言語としての日本語習得における社会・心理的側面の研究は十分に行われてきたとは言えず、また、どのように研究すべきか分からないという声もよく聞く。本研修では、日本語習得における社会・心理的側面に対してどのような研究方法・アプローチがあるのかについて考えた。

【講演】「実験的手法」内田伸子（お茶の水女子大学）、「質問紙調査法」杉本明子（国立国語研究所）、「エスノグラフィー」柴山真琴（東京外国語大学）